

ハナショウブの品種分類表

日本花菖蒲協会 (2019年修正版)

[解説] 本表は歴史・文化的背景、及び外観を中心としたハナショウブ園芸品種の新しい分類表である。

1. 本分類では欧米のアイリス協会使用の呼称に合わせて、それぞれの品種群が成立した地名+タイプ、または地名+型とする。
2. 各型、タイプを戦前と戦後に二分した。戦前は各地域内で独自の育種目標により選抜されてきた系統であったものが、第二次世界大戦後は系統間交雑が開始された結果、系統という遺伝学的な括りが通用しなくなったことによる。
3. 育種家名等を使用した育成品種とは、概ね十数品種以上が現存し一定の品種群を形成しているもの。
4. 品種の普及や保存・継承を考慮して、品種名の付いた個体はいずれも同一クローン (同一個体由来の栄養繁殖したもの) に限定する。
5. 花期は関東以西を基準とする。

分類	細分類		戦前品種の由来と特性、及び戦後品種の特性
江戸型 または 江戸タイプ	戦前品種 (古花)	江戸花菖蒲 (江戸系) * 発祥地である堀切では単に花菖蒲と呼ばれていた。 神奈川県農事試験場育成品種	由来: 江戸時代、各地から集められたハナショウブの変異個体を元に改良された品種群で、遺伝的、形態的に種々雑多なものを含むが、多くが性質強健で風雨に強く花菖蒲園での観賞や栽培に適する。また堀切地区では切花営利栽培が盛んであった為、切花向き品種も含んでいる。現在、葛飾区立堀切菖蒲園や明治神宮に保存されているが、詳細に見ると同名異品種が複数存在する。なお、松平菖翁の育成品種は菖翁花と呼ばれる。 草型: 花茎は葉上に出て枝咲き種あり。葉性は硬直で直葉が多い。 花型: 三英、六英、八重咲、玉咲等変化し、花径も大小種々あり。(多様性あり) 花卉: 外花被は横開張。内外花被共に一定型がない。薬片は中位で花卉間にやや隙間あり。 花色: 花色、配色共に変化に富む。 花期: 極早生は5月下旬から、他は6月上旬から下旬にわたる。 草勢: 強健 戦後品種: 外花被が横開張する伝統的花型を中心とするが、他系統との交配による中間型のものや肥後、伊勢、長井タイプの花型に収まり切れない雑多なものも含む。
	戦後品種 (新花)	吉江清朗育成品種 伊藤東一育成品種 押田茂夫育成品種 平尾秀一育成品種 加茂花菖蒲園育成品種 清水 弘育成品種	
肥後型 または 肥後タイプ	戦前品種 (古花)	肥後花菖蒲 (肥後系) * 発祥地の満月会では熊本花菖蒲と呼ぶ 西田衆芳園育成品種	由来: 江戸から伝わった松平菖翁の品種を元に熊本の満月会において改良された品種群。開花した鉢植えを室内に持ち込んで観賞するため、大輪の外花被同士が互いに重なりあって豪華に垂れるように改良された姿には誰もが圧倒される。特に雌しべ(芯)の大きさと立ち具合が鑑賞ポイントとなる。 草型: 花茎僅かに葉上に抽出、時に分枝、葉幅広くやや垂れ葉 花型: 六英を普通とし、三英(内花被は緩く立上る)や八重有り、花径は巨大性を有する。 花卉: 外花被が大きく展開し、雌しべや薬片も大型で立ち上がる。 花色: 本来は紫・紅紫・白色が主であるが、現在では他の色彩や配色が加わっている。 花期: 6月中旬からの晩生が多い。 草勢: 中位で繁殖力がやや弱い。 戦後品種: 他系統との交配によりやや中間型となっているが、六英を中心とする豪華で重量感のある花容を備えて武士の威厳と重厚な儒教精神を表現しているもの。
	戦後品種 (新花)	光田義男育成品種 平尾秀一育成品種 押田茂夫育成品種 加茂花菖蒲園育成品種	
伊勢型 または 伊勢タイプ	戦前品種 (古花)	伊勢花菖蒲 (伊勢系) * 発祥地の松阪市では松阪花菖蒲と呼ぶ	由来: 江戸時代、松坂地方において鉢植え室内展示目的に改良された松阪三花の一つ。中輪の外花被は重なり合いながら、大きく下垂するという優雅な特性をもつ。薬片の鶏冠(蜘蛛手)や縮緬の弁質は花卉全体の淡い色彩と相まって繊細優美な姿を見せる。伊勢神宮や齋宮の存在と綿花栽培の風土で培われた独特の優雅さを表現している。 草型: 花茎と葉長ほぼ等しく分枝せず。葉幅やや狭く直葉が多い。 花型: 三英を本来とする。花径中位
	戦後品種 (新花)	富野耕治育成品種 前田七郎育成品種 加茂花菖蒲園育成品種	花卉: 外花被は縮緬地薄弁で下垂、内花被は抱え立つ。薬片は鶏冠状を呈する。 花色: 清楚で淡色なものが多い。 花期: 6月上旬から始まり下旬まで。 草勢: やや弱い。 戦後品種: 他系統との交配によりやや中間型となっているが、三英垂咲の優美な花容を残しているもの
長井型 または 長井タイプ	戦前品種	長井古種 * 発祥地の長井市ではあやめと呼んでいた。	由来: 山形県長井市あやめ公園で戦前より収集されていた栽培集団より、昭和34年に見出された品種群で、小輪で素朴な姿のために花菖蒲改良始めの姿を彷彿とさせる。 特性: 草型、花型が長井産ハナショウブに近いものから花色・花径等が豊かになり栽培品種との中間的形態を示すものまでを含む。草勢は強健で株更新の間隔が空けられる。
	戦後品種 (新花)	長井あやめ公園育成品種 加茂花菖蒲園育成品種	戦後品種: 左記の2群は片親を長井古種とする。自生地ハナショウブと栽培品種との間で生じた浸透交雑種、及び自然変異タイプと栽培品種間の人為交配による初期世代も長井古種に近似の形態を示し、何れもハナショウブの面影を残している。先駆的・象徴的な存在である長井の地名を冠し、これらすべてを長井タイプと呼ぶ。
自然変異型 または、自然 変異タイプ	戦後品種	国内発見種 国外発見種	由来: 自生地で見出された標準的ハナショウブとは異なる形質を持つ自然突然変異の株分け個体 特性: 花型、花色、配色等の点で観賞価値が高いと見なされるもの 特記: 自生地に見られる標準的な個体をプロトタイプ(原型)と呼ぶ。
外国品種	戦後品種	米国品種が中心 * 他にロシア品種があり、中国でも育種が開始されている。	由来: 日本から導入した品種をもとに、戦前より米国中心に育種が進んでいる。 特性: 戦後暫くは江戸系の面影を残していたが、その後はより色彩鮮明に改良されている。特に六英咲では雌しべが変形して花の中心部が賑やかになっているものが多い。 特記: 米国ペーン氏の品種は我が国である程度普及したが、それ以後の品種は普及には至っていない。しかし強健で鮮明な色彩を持つので日本品種との再交配が期待される。
種間雑種	戦後品種	加茂花菖蒲育成品種 清水 弘育成品種 * キハナショウブと呼ばれる。	明治時代に欧州から輸入されたキョウブとハナショウブとの間の種間雑種は、小輪だがハナショウブにない純黄色やその他の色彩を持っている。不稔で正常花粉や種子が出来ず、外来植物であるキョウブのように水路伝いに種子が逸出して自然繁殖することはない。但し、四倍体キョウブとの雑種(堺の黄金)は僅かな稔性があるので、花菖蒲園での栽培は避けた方がよい。